

2 三十年目の津軽紀行

作者：千葉市在住 50 代男性会社役員

作品の概要	<p>今年 8 月、夫婦で、太宰生誕 100 年で沸き立つ津軽への 3 泊 4 日の旅を計画。作者は 30 年前に一人で津軽を訪れたことがある。旅の大きな目的は、30 年前芦野公園の太宰治文学碑前で撮った写真と同じポーズで写真を撮ること。</p> <p>紀行文の初日は、宿泊地の浅虫温泉からレンタカーで蟹田・観瀾山、平館・不老不死温泉、義経寺、龍飛岬観光案内所を巡った後、大鱈温泉に宿泊。2 日目は、弘前から観光タクシーで十三湖、小泊、芦野公園、津島家新座敷を巡り、弘前に戻る旅程。</p> <p>作者は、中学卒業の春に『人間失格』を読んで以来、全集を買うほどの太宰ファン。20 歳のとき北海道旅行の途中で津軽に立ち寄り、芦野公園で撮った写真と斜陽館を映した 2 枚だけがアルバムに残っている。太宰の『津軽』執筆の旅を辿ることは、自分の青春を今一度噛み締めること。当時の自分の思いを蘇らせるため、妻と二人で津軽に旅立つ。</p> <p>蟹田では『津軽』の N 君や Sさんと太宰のやりとりに思いを馳せ、文学碑の碑文が選ばれた理由を作者なりに解釈、義経寺、旧奥谷旅館での太宰と N 君の姿と思いを想像する。</p> <p>弘前から乗った観光タクシーの運転手 A さんは、太宰に詳しく、小説の一節をまじえながら解説、太宰好きの作者との話はずきない。しかも、小泊の旧越野金物店、横野たばこ店、金木の津島家新座敷と作者が知らない地を次々と案内してくれる。作者にとって、その日は忘れ得ぬ思い出となった。</p> <p>旅のクライマックス芦野公園では、浮ついた気持ちを抑えきれず、文学碑の周りをじっくり見ることなく写真を撮っただけ。自宅に戻ってアルバムに 2 枚の写真を並べると、裏切られた青年の姿が…。別人のような写真を見て妻は「玉手箱を開けたんじゃないの」と笑いが止まらない。</p>
選考理由	<p>太宰の『津軽』の跡を追い、現在の津軽の様子がよく写し出されている。</p> <p>太宰文学が相当身につけている。</p> <p>30 年ぶりの太宰との〈再会〉が感動的に描写されている。</p> <p>文章力もあり、読み手を圧倒する。</p> <p>名ガイドによる旅の思い出や、とても満足のいく旅であったことがよく伝わってくる。</p> <p>軽妙な夫婦の掛け合いもほほえましい。</p>